

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
こ—9	五苓散	<p>猪苓 (甘寒) 1.8g・沢瀉 (甘寒) 3.5g・茯苓 (甘平) 1.8g・桂枝 (辛温) 1.2g・白朮 (苦温) 1.8g 上の5味を末となし、1回に2gをおも湯を以ってよくかき混ぜて、1日3回服用する。 おも湯で服用させるか、または温服後は多量の温かい湯を飲んで、発汗解表、行気行水の薬力を助ける。汗が出ればそれで癒ゆる。</p> <p>弁太陽病脈証併治中第六第 41 条 (傷寒論) 「太陽病汗を發して後、大いに汗出で胃中乾き、煩躁眠るを得ず。水を飲むを得んと欲する者は少々与えて之を飲ませ、胃氣をして和せしむれば則ち癒ゆ。若し脈浮、小便不利、微熱消渴するものは五苓散を与え之を主る。」</p> <p>汗出で、^{すなわ}則ち、^{しょうかつ}若し、^{つかさど}消渴、主る</p> <p>解説 太陽の経を病んでいるので、汗を發してやったところが、汗が大変に出て、そのために胃の中が乾いてしまい、渴のために、あつ苦しくて眠ることが出来なくなってしまっているもので、水を飲みたがっている者には、少し水を与えてやって、胃を潤して、胃氣を調和してやれば、それで癒えるのである。もしその場合に、水を与えてやっても治らずに、脈が浮いて小便の出が悪く、微しく熱があって、やたらに咽が渴く者には、五苓散を与えれば主治すぬ。 太陽病で汗が出過ぎると、津液が消耗して胃が乾燥し、水を飲みたがってイライラして、また苦しくて眠れなくなる。これがひどくなると胃熱が強くなり陽明証になるのであるが、この条文の場合表証が治って脈浮もなく、小便も普通に出て、少腹満もなく、陽明証は無い。口渴は単純な水不足であるので、少し水を飲んで胃を潤すと治る。ところが水を与えてやっても治らずに、脈浮 (表証が残っている)、小便不利、微熱 (胃の虚熱がある)、消渴する場合は、太陽病蓄水証になったもので、五苓散が主治する。病理については、下記の「弁太陽病脈証併治中第六第 43 条 (傷寒論)」を参照されたし。 発汗と胃の関係では、発汗すると、胃の中が乾き口渴を發し、熱苦しさを感ずる様になるのである。</p> <p>五苓散証 新古方薬囊によれば「熱ありて、汗出で、咽渴きて水を欲しがり、小便の出ない者。小便少なく、咽渴きて水を呑み、水を呑めば忽ち戻す者。非常に水を欲しがりてうるさく、小便の利せざる者。頭や体に痛みがあり、熱があつて悪寒し、汗出で咽渴き、劇しく水を飲みたがり、呑めばまた吐く者。本方の一番の目標は、渴と小便の不利とに有り。」と記されている。</p> <p>弁太陽病脈証併治中第六第 42 条 (傷寒論) 「発汗^{おわ}し已り、脈浮数、煩渴する者は五苓散之を^{つかさど}主る。」</p> <p>解説 汗を發し終わっても、脈が浮いて早く打っていて、咽がやたらに渴いて苦しい者には、五苓散が主治する。 発汗したにもかかわらず、脈が浮数であるということは、表の熱が取れずに、熱盛んであることを示す。 「脈浮」は病が表にあり、「脈数」は熱の表われであり、発汗したにもかかわらず表熱が衰えず、裏の津液が少なくなり、裏に熱を持ったのである。</p> <p>弁太陽病脈証併治中第六第 43 条 (傷寒論) 「傷寒^い汗出でて渴する者五苓散之を^{つかさど}主る。渴せざる者茯苓甘草湯之を^{つかさど}主る。」</p> <p>解説 寒に侵されて、発熱し、汗が出て、咽が渴く者は、五苓散が主治する。発熱して、汗が出て、咽の渴かない者は、茯苓甘草湯が主治する。 太陽蓄水証になって、小便不利し、発熱して、汗が出て、咽が渴く場合は、五苓散が主治する。ところが元来脾胃が弱い人や、脾胃の陽氣が低下している人が、汗が出過ぎたからといって水を飲み過ぎると、胃が冷えて、脾の運化が失調し、寒飲が胃に内停して胃陽虚となり、更に、水邪が心に上昇し心陽虚にもなって、心下部に動悸が生じる (心下悸)。心下部を押えると抵抗がある (心下痞)、また胃脘部に振水音が生じる。また陽氣の流れを滞らせてしまうので、手足の末端まで陽氣が巡りにくくなり、少し四肢厥冷傾向が現われる。これは胃虚によって持たされた中焦の水滯で、五苓散証のように膀胱の氣化作用は妨げられていないので、小便は自利し、口渴もない。このような場合は、茯苓甘草湯で中焦の水を除けば、胃腸の陽氣が巡って治る。もし茯苓甘草湯で中焦の水を除かなければ、胃腸が水浸しになって、四肢厥冷に加えて、下痢まで起こすようになる。こうなると四逆湯証になる。もし水を飲んで、小便の出が悪ければ、膀胱の氣化作用が障害されて、水邪が下焦 (膀胱) に溜まるので少腹満となり、下腹部が張って苦しむことになる (苦裏急)。これは五苓散で治す。 五苓散証は、水飲内停の病位が、下焦の膀胱にあるのに対し、茯苓甘草湯証は、中焦の胃で病位が高いので、苓桂朮甘湯と共に太陰病に属すと見てよい。 茯苓甘草湯は、五苓散の猪苓・沢瀉を除いて、代わりに生姜を入れて胃を温める。</p> <p>「方劑決定のコツ」の注釈 五苓散の場合は、傷寒が治っていないのに自然発汗が生じたのは、表の熱が裏の方に影響を及ぼして裏にも熱を持ったため、同時に渴が出て来たのである。 茯苓甘草湯は、傷寒が治っていないのに自然発汗が生じた場合に、発汗によって陽氣を亡ぼし、表が冷えて中焦に水分の停滞が生じたもので、渴は生じないのである。</p> <p>参考 太陽蓄水証の五苓散証の場合は、太陽病表証が解除しなかったり、或いは発汗法を行なっても方法が妥当でなかったりすると、太陽經の邪が経脈を通して、裏の腑である膀胱に入り、膀胱の氣化作用が障害されて、水が下焦 (膀胱) に蓄まり、小便不利となり、下腹部が膨満する (小腹痛)。また津液が体を巡らなくなるので、水が上に昇らず、煩渴して水を飲みたがるが飲んでも渴は癒やされず、飲んだ水は吸収されず、上逆して飲めば即座に吐くという水逆の証となる。また表証も残っているので、脈浮、または浮数で少し表熱もある。また小便不利により、下焦が水浸しになるので下痢する。下痢は、水様便で腹痛はない。この様に太陽經の邪と、水が、下焦 (膀胱) で結合したものを太陽蓄水証といい、五苓散が主治する。</p> <p>痺病 (風寒湿の邪に当てられて、氣血の流れが阻害され、痛み、しびれを起こす病) の対処 発熱、自汗がある時は、桂枝加朮湯を用いる。 発熱、無汗の時は、麻黄加朮湯を用いる。 小便不利で、大便快なれば、茯苓甘草湯・桂枝去桂加茯苓白朮湯を用いる。 小便自利で、大便硬には、白朮附子湯 (朮附湯) を用いる。</p> <p>弁太陽病脈証併治中第六第 44 条 (傷寒論)</p>

「中風発熱6、7日解せずして煩し、表裏の証有り、渴して水を飲まんと欲し、水入れば則ち吐する者を名づけて水逆と曰う。五苓散之主る。」

すなわ 則ち、白う、つかさど 主る

解説 風に当てられて熱が出て、6、7日目になっても治らずに苦しがり、表の証も裏の証もあって、咽が渴いて水を飲みたがり、水を飲み込むとすぐに吐いてしまうものを、水逆と名づけるのである。水逆には**五苓散**が主治する。

太陽経の邪が経脈を通り、裏の腑である膀胱に入り、膀胱の気化作用が障害されて、水は下焦に畜まり、小便不利となり下腹部が膨満する（少腹満）。また津液が体を循らなくなるので、水が上に昇らずに津液が咽に達せず、煩渴して水を飲みたがるが、飲んでも渴は癒やされない、水を飲むことにより水気が胃を犯して「胃は降濁を主る」作用が失調するだけでなく、胃気上逆して、水を飲んでも即座に吐いて胃が水を受け付けなくなるのを水逆といい、嘔吐後も渴は続く。同時に表証も残っており、脈浮、または浮数で少し表熱もある。水逆証は太陽蓄水証の重症で、**五苓散**が主治する。

「方剂決定のコツ」の注釈

中風であるので表が虚している。熱を發して6~7日も続いて解せずして煩が生じたもので、表証も裏証も取れないで生じた煩は、裏の虚熱より生ずる場合が多いので、6~7日も熱も解せず煩を起こせば、熱は裏に入ったと診るべきである。ところが、裏に完全に入り切らずに表裏の証がある。悪寒、発熱は表証があり、咽が渴いて水を飲みたがり、小便不利、心煩は裏証があるのは、**五苓散**の主治であるが、この場合は咽が渴いて水を飲みたがり、水を飲むとその水を吐いてしまう水逆を起こしたものである。

胃に熱があれば、飲んだ水はどんどん消されて発汗するか、小便で利されてしまうのであるが、胃熱が少なく、小便不利があれば水を吐すか、痰飲病を起こすのである。

痰飲病は、胃が虚して力が無いから水逆を起こす力が無いので、飲病を起こすのであって、**五苓散**の場合は、表熱共に胃の虚熱も伴うので水逆が起こるのである。

五苓散証

発熱、汗出、口渴、小便不利、嘔吐、下痢、頭痛などの症状がある。

参考

五苓散は、膀胱の気化作用の失調による小便不利と水飲内停に対する行気行水、通利小便が主体であるので、表熱がなくても使える。

また発汗が不足する場合には、表証が残って脈は浮または浮数のままで、熱も少し残る。この場合は**桂枝湯**で対応するか、または瘧様の症状がある時は太陽病軽症で、**桂枝麻黄各半湯**・**桂枝二麻黄一湯**・**桂枝二越婢一湯**などで対処する。

弁太陽病脈証併治下第七第14条（傷寒論）

「病、陽に在れば応に汗を以て之を解すべきに反って冷水を以て之を撰き、若しくは之に濯げば其の熱却かされて去るを得ず。いよいよ更に益煩し、肉上粟起す。意に水を飲まんと欲すれども、反って渴せざる者は**文蛤散**を服す。若し癒えざる者は**五苓散**を与う。寒寒の結胸、熱証無き者は**三物小陷胸湯**を与う。白散も亦服す可し。」

まさ、もつ、げ、かえ、つ、おびや、ますます、そつ、こころ、も、またふく、べし 忘に、以て、解す、反って、撰き、濯げば、却かされて、益、粟起、意に、若し、亦服す可し

解説 病邪が表にある時には、発汗によって病を解すべきであるのに、熱いからといって冷水を口に含んで病人の体に吹きかけたり、又は濯ぎかけると、寒湿が体表に鬱滞し、表邪が体表より発散せずに、表にこもった熱が取れなくなって、表邪がまだ化熱していかない状態が一層ひどくなって、熱のために苦しがるようになる。そのために肉上粟起（皮膚に粟の粒の様なもの（鳥肌）が全身又はあちこちに出来てしまうこと）を生じる。そして気持では水を飲みたい様な感じがあるが、反って水は飲み込めない様な者には、**文蛤散**を服用させて軟堅化痰させるとよい。**文蛤散**を服用しても治らない場合は、冷えが強く邪が深く下焦まで進入して、膀胱の気化障害を起こして口渴、小便不利になってしまったもので、この様な場合には、**五苓散**を与えてやりなさい。その場合に、表を冷やした寒が内に入りこんで、熱が胸の中に追込まれて結する様になり、熱発の証が無いものには、三物より出来ている**小陷胸湯**を与えてやりなさい。この場合に**白散**の証があれば、また服用してもよい。

桔梗白散は、胸中に熱が入って、この場合肺癰を起こす証に用いる。

文蛤散証

新古方薬囊によれば「身体に熱があつて、汗は出ず、寒気もあり、無理に水を飲みたがるもの、但し此は、風邪の初期などに自然に発する証候に非ず、無理に熱を体内に追込んだりした時に多く発する証状なり、注意あるべし。また平常胃が悪く、食欲はあれども多く食することが出来ず、むやみに水を飲みたがり、幾ら飲んでも呑み足りない者。」と記されている。

文蛤散の証は渴があるけれども、この条文では渴せずとあるのでおかしいと思われるが、条文では発汗すべきをさせないために、いろいろの病証が出るのであって、体内には水分があるために渴は生じないだけであるから、**文蛤散**でよいのである。

五苓散証

新古方薬囊によれば「熱があつて、汗が出て、咽が渴いて水を欲しがり、小便の出ない者。小便少なく、咽が渴いて水を飲み、水を飲めば忽ち戻す者。非常に水を欲しがりてうるさく、小便の利せざる者。頭や体に痛みがあり、熱があつて悪寒し、汗出でて咽渴き、激しく水を飲みたがり、飲めばまた吐く者。本方の一番の目標は、渴と小便の不利とに有り。」と記されている。

小陷胸湯証

新古方薬囊によれば「小結胸の病は、まさに心下にあり、之を按ずれば即ち痛み、脈浮滑なるもの。」と記されている。

「方剂決定のコツ」の注釈

裏に熱があり口渴が無い者は、寒が表にあるので、**文蛤散**を与えて表中の水寒の気を散ずればよい、水と熱が相搏つて裏に伝えようとするために癒えざる者は、**五苓散**で胃に入った虚熱を除き表を發してやり、もし始めに水をかけてから急に胸中が苦しくなり、発熱や渴が無い者は、始め熱が表にあったものが水寒によって、この熱を發散せず外泄することが出来ず、熱が裏に内攻し胸中に結ばれて結胸を起こし、心下鞭するものを**三物小陷胸湯**で治す。もし結ばれざれば**白散**の証である。「病が陽に在る」は、病邪が表に在るということである。そして表に熱が集まり煩を生じているのである。この場合には、表を温めて発汗により表に在る病邪を解すると共に煩も除かれるのである。ところが温めて発汗させるべきところを反って冷水を口に含んで病人の体に吹きかけたり、濯いでやったりすると、腠理を閉めてしまい、そのために熱気が一時的に内に入るが、しかし、また表に戻り煩がひどくなり、その勢いが劇しくなって汗穴を押し広げるために、肌の表面に粟粒の様に水泡とか吹き出物が出来るのである。

文蛤散は、発汗すべき水分が発汗できずに滞っている証に用いる。その血に熱を持って渴が現われるもので、その血の熱を平らげて、血に潤いを与えてやる働きがあるものと思われる。

文蛤散の場合は、表証がなく、裏の上焦に熱が入ったもので、渴が現われるのが理にかなっている。**五苓散**の場合は、裏に熱が入っても、まだ表にも熱があり、表熱は外に出ようとして、裏熱は更に胃に入ろうとしているために渴を生ずるのであると思われる。ところが表が冷えてしまって熱が完全に裏に入り、胸中に結ばれてしまうと結胸を起こしてしまうのである。熱証が強い場合は、熱が陽明の胃に入り胃熱が盛んになり大煩渴となる陽明胃熱の証となる。

弁太陽病脈証併治下第七第29条（傷寒論）

「^{もと}本、之を下^{くだ}すを以ての故に心下痞し、^げ瀉心湯を与え痞解せず、其の人渴して口燥、煩し小便不利する者は^{つかさど}五苓散之を主る。」

解説 本来、下したために心下痞が生じたものは、**瀉心湯**を与えてやるべきである。それでも心下痞が治らずに病人が咽が渴いて水を飲みたがり、口が渴いて苦しがり、小便の出の悪いものには、**五苓散**が主治するのである。

「方剂決定のコツ」の注釈

本来、下したために心下痞が生ずるのは、裏の陽気が虚する時に、心下痞するのである。

瀉心湯は、元々心下痞を治すものであって、その心下痞は、その部分の陰気の虚によって、血行の不良が生じたものであるから、**瀉心湯**を与えても解せないものは、陰気の虚による血行の不良から来る痞では無いということになる。その人渴し、口燥煩して小便不利する者は、水の循環悪く、水の停滞によって生ずる心下痞であるので、**五苓散**で表裏を解して水の循環をよくしてやれば、心下の痞も癒えるのである。

弁陽明病脈証併治第八第 65 条（傷寒論）

「太陽病、寸緩、関浮、尺弱、其の人発熱汗出で復た悪寒し、嘔せず但だ心下痞する者は此れ医之を下すを以て也。もし其の下さざる者、病人悪寒せずして渴する者は此れ転じて陽明に属する也。小便数の者は大便必ず硬く、更衣せざること十日なれど苦しむ所無き也。渴して水を飲まんと欲すれば少々之を与え、但法を以て之を救う。渴する者は**五苓散**に宜し。」

汗出で、復た、但だ、下すを以て、小便数、

解説 太陽病で、寸口の脈が緩やかで、関上の脈が浮いて、尺脈が弱い状態の人が、熱を發して汗が出て、その上に悪寒がして嘔き気はなく、ただみぞおちの辺りに痞えのある者は、医が下しをかけたために、この様な症状を現わしたのである。もしも病人を下していないもので、悪寒せずに、咽の渴く者は、これは自然に病邪が内に入ってしまったのであって、陽明病になったのである。小便の回数が多い者は、大便が必ず硬くなって便通がないことが 10 日続いても苦しい症状は無い。咽が渴いて水を飲みたがるものには、少しずつ水を与えてやりなさい。そして正しい治方で病を治してやりなさい。咽が渴く者には**五苓散**がよい。

寸口の脈が緩であるのは、表に陽気が少なく虚している現われであり、関上の脈の浮は、中焦に熱気が集まる証である。尺脈が弱であるのは、下焦の気が少ない現われである。この様な脈を表わしている人が発熱して汗が出るのは、中焦に熱気が入って、更に嘔き気は無く、ただ心下痞を生じ、その上に悪寒がするのは、発熱、汗が出ることによって表が虚して悪寒が生じた太陽病表虚証で、この病証は、医者が下しをかけたために、表邪が内陥してしまって、この様な症状を現わしたのである。この様な場合は、先ず**桂枝湯**で解表し、後で**半夏瀉心湯**で痞えを治すとよい。もしも病人を下していないもので、悪寒せずに、咽の渴く者は、これは自然に病邪が内に入ってしまったのであって、陽明病になったのである。この場合は**白虎加人参湯**を用いるとよい。小便の回数が多い者は、大便は必ず硬くなるのであるが、これは胃実によって起きたものでは無く、小便の数により津液が少なくなって大便が硬くなり、また小便より裏熱が取れてしまうので、大便が硬くなって便通が無いことが十日も続いても苦しい症状は無いのである。この様な場合は脾約（胃熱のために脾が障害を受けたもの）で**麻子仁丸**を用いるとよい。咽が渴いて水を飲みたがるものには、少しずつ与えてやれば自然に治るが、水を飲みたがり、飲んでも渴が取れない場合は、脾約の程度が劇しく、水飲による水気の内停も生じ、膀胱の気化障害も起こし、小便不利から生ずる津液不足で、更に咽が渴く様になったもので、この様な場合には**五苓散**を用いるよい。

胃実の不和が明らかになった場合は、**調胃承気湯**を用いることになる。

弁霍乱病脈証併治第十三第 6 条（傷寒論）

「^{かくらん}霍乱頭痛、発熱、身疼痛、熱多く、水を飲まんと欲する者は**五苓散**之を主る。^{つかさど}寒多く、水を用いざる者は、**理中丸**之を主る。」

解説 霍乱で、頭痛して、熱を發し、身体がうずき痛み、熱の症状が多くて水を飲みたがる者には、**五苓散**が主治する。寒の症状が多くて水を飲みたがらぬのは、**理中丸**が主治する。

「方剂決定のコツ」の注釈

熱多くは、胃に熱がこもって起こる症状で、寒多くは、中焦の内寒による症状である。

五苓散は、**桂枝・白朮**で外を暖め、**沢瀉**で内熱を去る。

人参湯（**理中湯**）は、**白朮**で外を温め、**人参**で裏の虚熱を鎮め、**乾姜**で内寒を除く。

五苓散証の場合は

太陽病表証が解除しなかつたり、或いは発汗法を行っても方法が妥当でなかつたりすると、太陽経の熱邪が経脈を伝わって裏の膀胱に入り、膀胱の気化作用が障害され、水は下焦に蓄まり小便不利となり、下腹部が膨満する（少腹満）。また津液が体を循らなくなるので水が上に昇らず、煩渴して水を飲みたがり、飲んでも渴は癒やされず、飲んだ水は吸収されず上逆して飲めば即座に嘔くという水逆の証となる。この場合、ゲゲエ言わずにすんなり嘔吐する。また表証も残っているので、脈浮、または脈数で少し表熱もある。また下焦が水浸しになるので下痢する。下痢は水様便で腹痛はない。この様に、太陽経の熱邪と水が、下焦で結合したものを太陽蓄水証といい、**五苓散**が主治する。また膀胱湿熱を伴った場合は、**猪苓湯**を用いる。

理中丸（**人参湯**）証の場合は

脾胃虚寒があり、脾胃の陽気不足による運化障害のために寒湿困脾となり、口渴は無く、水湿が滞って胃寒（胃部が張って、冷えて痛む）がある場合は、**平胃散**を用いる。更に、寒が多い太陰病脾虚寒では、寒湿が生じ易く下焦が水びたしとなり、霍乱（下痢が生じ、寒湿が上逆して嘔吐し、悪心も伴う）が生じる。口渴は無く、寒湿のために嘔吐し、下痢は無いが非常に軽い。胃虚寒が主な場合は、**呉茱萸湯**を用いるが、冷えると腹痛、下痢を起こし易く、胃が痞えた感じがして少食、また胸の中も痞えて、身体がだるく元気がないなどを伴う場合は、**理中湯**（**人参湯**）を用い、更に表証を伴う場合は、**桂枝人参湯**を用い、即ち、寒が多く症状が激しい場合には、**附子理中湯**を用いるとよい。

「方剂決定のコツ」の注釈

三焦は水穀の道路をいい、邪が上焦にあれば吐して利せず、邪が下焦にあれば利して嘔せず、邪が中焦にあれば吐して利すのであり、飲食を欲せず、寒熱を調節出来ずして霍乱を起こすと考えられる。とすれば**五苓散**と**理中丸**との違いは、嘔と下痢、胃の虚熱を取り、津液の循環をよくして邪を散ずるのが**五苓散**で、**理中丸**は、胃を温めて津液の循環をよくして温めて治すということになる。

参考 霍乱は下痢、嘔吐の激しい病で、霍乱には、表証と裏証の 2 種類があり、表証で熱が多い**五苓散**証と、裏証で寒の多い**理中丸**（**人参湯**）証の他に、少陰病の**四逆湯**証・**四逆加人参湯**証・**通脈四逆湯**証でも見られる。

痰飲咳嗽病脈証併治第十二第 32 条（金匱要略）

「たとえば瘦人^{しゅうじんきいか} 臍下に悸あり^{せんぼつ} 涎沫を吐して癩眩^{てんげん}すこれ水也、五苓散之を^{つかさど}主る。」

解説 例えば、痩せていて臍の下（下腹部）に動悸があり、よだれや泡の様な唾を吐いて、ひっくり返る様な激しいめまいのするものは、水から来ているのである。五苓散が主治する。

胃陽不足の痩せた人は、水を津液に化す機能が弱く、裏位の腎に停水することが多い。故に腎水が上衝せんとして臍下に悸を生じ、上衝して肺水を生じると涎沫を吐し、肝血が発達せず眩を生じ、甚だしい場合は起立に耐えず癩倒する。

この状況下での五苓散は、猪苓で浮昇せる水飲を降下し、沢瀉で肺水を降下し、白朮で心下水飲を下し、茯苓で利水、および動悸の鎮静を計り、桂枝で胃腸を補し、心気を助け腎水の上昇を捌く。

「方剂決定のコツ」の注釈

痰飲病は、飲んだ水によって起きる病で、水分の取り過ぎが一番問題となる。

痩せた人は、脾胃の働きが弱いので、飲んだ水を正しく体に循らせる力が乏しいことを表わしている。

小半夏加茯苓湯の場合は、心下の隔間に水分の停滞を起こし、上に溢れて嘔を発するもので、眩悸（動悸、めまい）は、水が心と頭中に上逆したために起こるもので、眩悸（動悸、めまい）では倒れない、小半夏加茯苓湯の場合は、胃に寒があるために上逆の力が弱いと思われる。ところが、五苓散の場合は、悸の起こる場所が臍下で、臍下に悸があるものは苓桂甘藷湯も属し、茯苓甘藷湯も同じく水がからんでいるが、「奔豚を作さんと欲する」とあり、臍下の悸は発動すると、上衝の力が強く現われる。その上に涎沫を吐する水に気が働いてその力は強くなるので、衝逆も力が強く、めまいがして倒れるのである。五苓散証の場合は、胃中が燥いて津液が胃に少なく組織に停滞していて上記の証を起こすのである。

消渴小便利淋病脈証併治第十三第5条（金匱要略）

「脈浮にして小便利せず、微熱^{しゅうかつ} 消渴の者は、小便を利し汗を發するに宜し、五苓散之を^{つかさど}主る。」

解説 脈を診ると浮いていて、小便が充分に出ず、身体に少し熱があって、やたらに咽が渇くものは、当然小便を通じさせて、発汗させてやるべきである。それには五苓散が主治する。

太陽蓄水証になって、小便不利し、発熱して汗が出て、咽が渇く場合は、五苓散で小便を利し、発汗させると治る。

消渴小便利淋病脈証併治第十三第6条（金匱要略）

「渴して水を飲まんと欲し、水入れば^{すなわ}則ち吐する者。名づけて水逆という。五苓散之を主る。」

解説 咽が渇いて水を飲みたがり、水を飲み込むとすぐ吐いてしまう者を、水逆と名づけるのである。五苓散が主治する。

暑夏などに汗、尿を出して亡津液し、多量の水を飲んで消化し切れず、即ち水を津液に化すことが出来ずに、心下に停水している場合、停水は循らないので、口渴し、多量の水を飲むと心下の停水が逆上して即座に吐水する（水逆）。五苓散が主治する。

「方剂決定のコツ」の注釈

水逆は、胃が虚熱を持っているために、渇があり水を飲まんと欲しても、胃が水を散ずる力が無くて起こす。

五苓散で表から水と熱を發散し、下焦から小便を利してやれば水逆を起こさなくなる。

これに対して、水を飲んでも大煩渴が解せず、飲んだ水がどんと胃に停滞せずに、汗なり小便なりで發散、下泄してしまうのは、胃に実熱があるからで、この場合は白虎加人参湯が主治する。